

## IV 生徒の授業への構え

都 築 亨

「授業」を問題にする場合、その第一に意識すべきは生徒であり、就中、学習に対して、生徒がどのような構えでのぞんでいるかということである。ところが高校（中学校でも部分的には）での授業へのとりくみとしては、生徒についての関心は余りはられないで、むしろ教材研究に焦点がおかれ、授業研究 即、教材研究という様に考えられているのが実態である。

そして、授業での生徒の反応は、小・中学校でのそれと比べればたしかに比較にならぬほど少なく、拒否反応は学年を追うごとに高くなる。極言すれば、高校での授業を辛うじて成立させているのは大学受験のためという生徒の学習意識と、期末テストの成績に対する関心のみであり、中学校でも、愛知県で、高校入試科目が3教科となり、社会科、理科が受験科目から外された結果は、目に見えて、生徒のこれらの科目に対する態度が変わってしまったという。こうした状況の中で行なわれている授業は、もはや「授業」の名に値しないのではないだろうか。

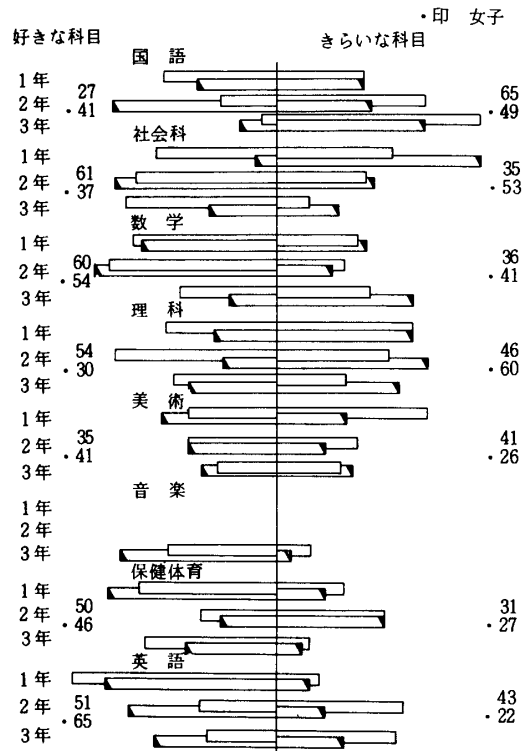
教材研究の重要さは言をまたないし、とくに内容ぬきで、高学年の授業が考えられるはずはないにしても、進学率において93.1%にまでひろがった現在の高校の状態を考えると、しっかりした教材構成をもってすれば学習内容が生徒の中に定着するはずだというような安易な授業観は期待すべくもないであろう。

われわれは一方では、前述のようにさまざまな形での授業形態と方法の改善をはかることによって、各教科における学習目標への到達をはかりながらも、一方では、授業に対する生徒の構えを問題とし、どこに興味関心をもっているか、何が学習の阻害要因なのか、本校生徒の実態把握とともに、学年、性別、教科ごとに「構え」の態様を考察してみようと考えた。

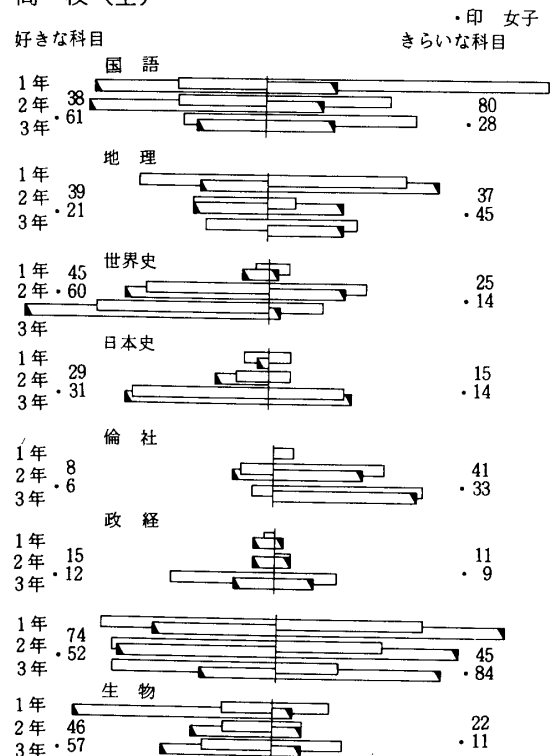
### (1) 好きな教科ときらいな教科

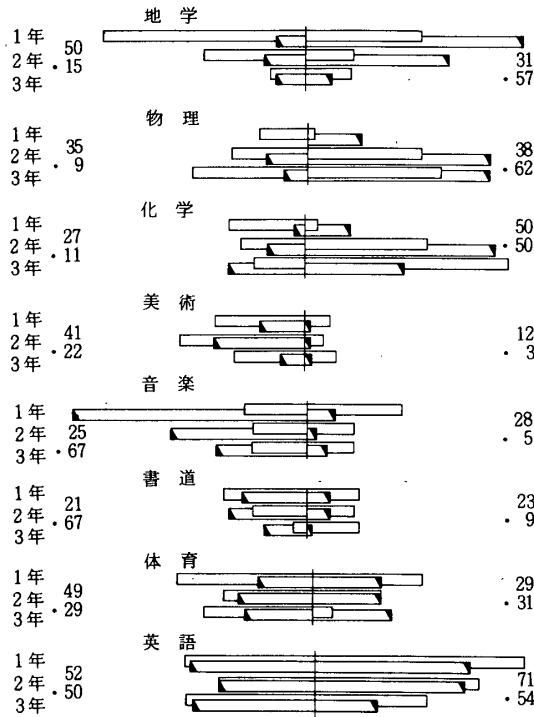
最も素朴な問題へのアプローチから出発したい。アンケート項目の第一に「学校での授業の中で、もっとも好きな教科(科目)は何ですか」とたずねてみた。その結果を、中学校・高校別に示すと次の如くである。(中央の線から左へそれぞれ学年別、男女別に好きと答えた者の数、右へ同じくきらいと答えた者の数をとってみた。両端の数値は1～3年合計の男・女の数である。◻ で示したのは女子の数)

### ① 中学校(全)



### ② 高校(全)

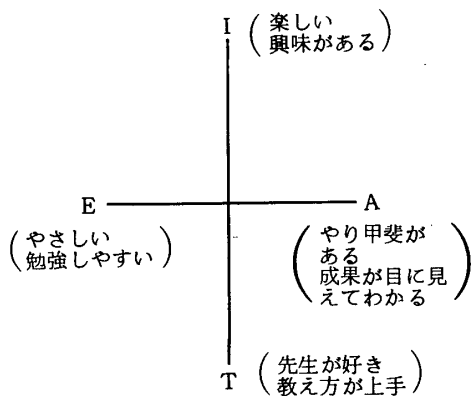




教科についての好き、嫌いの分析は他にもいろいろ試みられていると思うので、ここでは特にその統計分析をしようとは思っていない。教科の好き嫌いの反応の中で、特に高校になるほど、男女の偏りが大きくなっているのは授業をしにくくさせている1つの条件と考えられるのではないかと仮説をもつ位である。

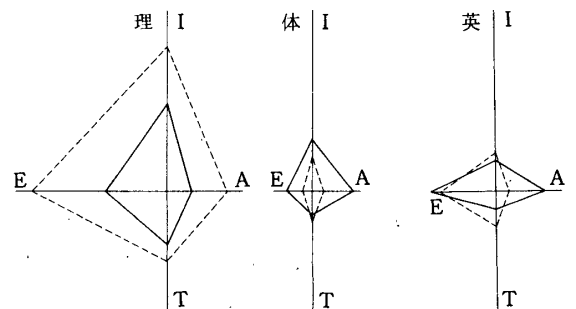
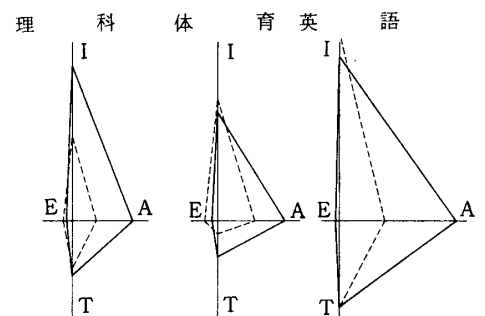
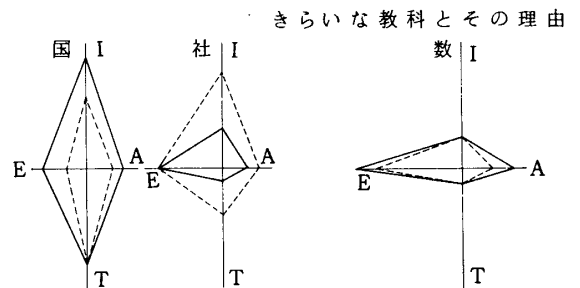
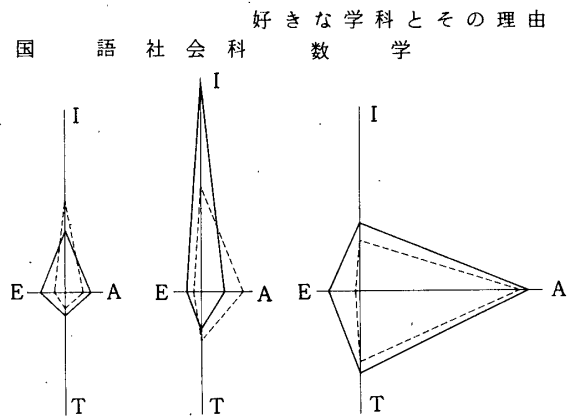
問題としたいのは、「好き」と反応している者がどのような理由で好きだと意識し、又「嫌い」と反応している者が、どのような理由で、そう意識しているのかということである。アンケートの中では、その理由を

- ア やさしい
- イ 難かしいがやりがいがある
- ウ 先生が好き
- エ 興味がある
- オ 受験のため勉強をしなければならないから
- カ 先生の教え方が上手だから
- キ 楽しく勉強できる
- ク 成果が目に見えてわかるから
- ケ 何となく好き (嫌いとする理由もこれらに対応する選択肢を索定した) という選択肢で回答させたが、これを、



I 興味 (学習者の側の自発的動機) T 先生 (指導者からの影響) を縦軸にとり、横軸に E 理解しやすさ (やさしい, 勉強しやすい) A 勉強のしがい (やり甲斐がある, 成果がわかる) をとって整理してみると、以下に示すような構図をまとめることができる。(点線は女子)

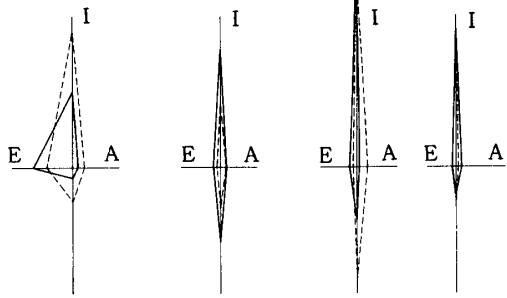
中学校



高 校

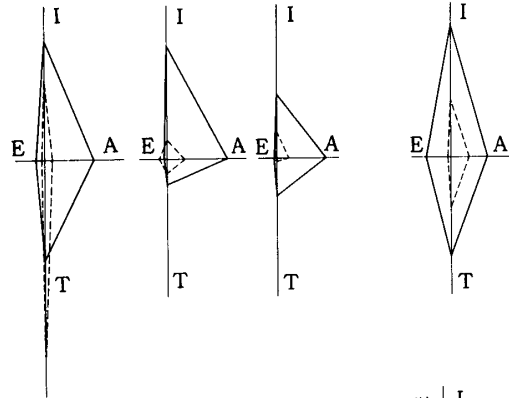
好きな学科とその理由

国 語 地 理 世 界 史 日 本 史

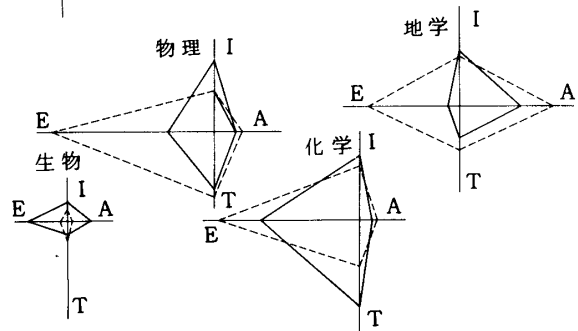
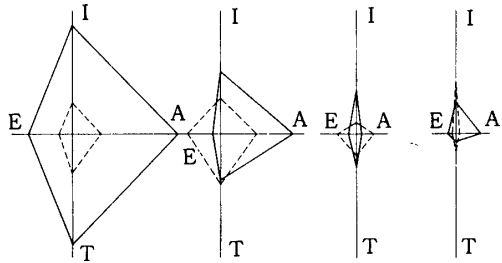


好きな学科とその理由

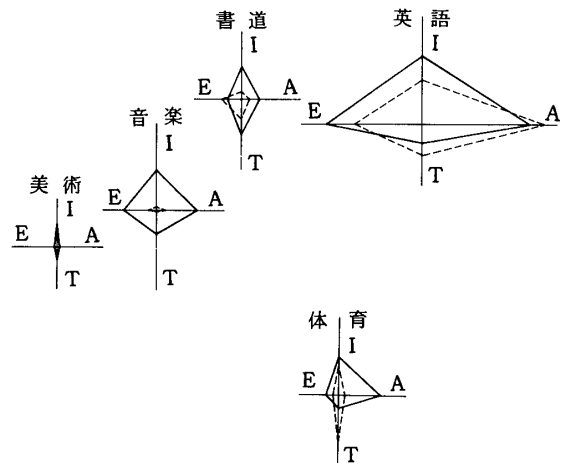
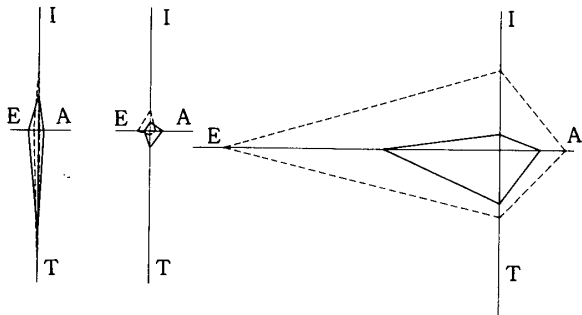
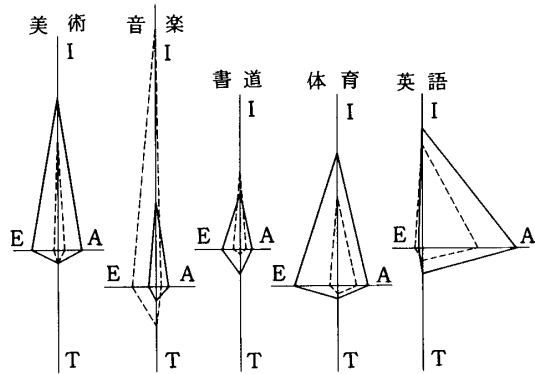
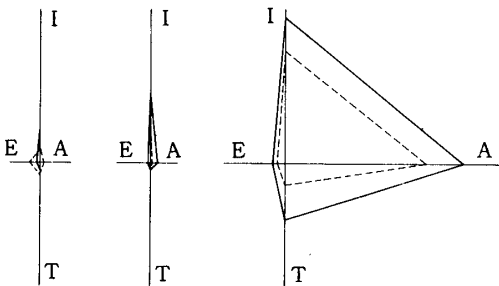
生 物 物 理 地 学



きれいな教科とその理由



倫 社 政 経 数 学



生徒の授業への構え

われわれが、授業研究グループを組織して、教科を超えた仲間で「授業」をとり上げようとしたのは、教科で独自の目標や困難点をもちながらも、一方では教科のワクをこえて授業についての共通性、問題があり得るのではないかという前提からであった。大きくみれば、文科系、理科系、芸術科目という群の中での共通性をみることもできるし、時にはその群の構成を前提にして学習指導もするが、しかし、生徒の構えをみると、(I, T, E, A グラフから) それとは又ちがった類型を見出すことができる。

- ① ほぼ均等な◇型、国語(やや女子のI指向がつよい。)地学(嫌いとする女子にE・Aの中がひろい)
- ② タテ軸型、社会科 特に 日本史・世界史(倫社政経はやや異った反応あり)生物(ややA指向がある)
- ③ ヨコ軸型、数学・物理(好きな者はAに、嫌いなものはE<むつかしい>に反応する)
- ④ A指向の△型 英語 中学の理科 化学(物理にもややこの傾向がみられる)

タテ軸 I Tに大きく伸びている教科は教科の内容に興味を持ち、かつ先生の好き嫌い、先生の教え方にも大きくかわりをもつ、いわば、興味・教師指向型である。この型の展開をみせる教科の授業は多分に興味をもたせ、そのために指導法を工夫する所から出発する。これに対してヨコ軸 E Aへのひろがりを示す教科では、学習についてのしがい、成就感と理解しやすさ、いわば、難易・成就指向型であり、数学や物理の面白さは、そうしたE A型の面白さであろう。難解

であるという意識が先に立って、一度も成就感を味い得ない大多数の生徒たちに対して、どのようにしたら、+のE A指向をもたせ得るかが指導の中心であり、学力差が大きいと考えられるこれらの教科では、学力差を前提として、何らかの形で学習のしがいを見出させることが必要であろう。

(2) 授業に対する構え・希望など

授業の構えの中で、どの教科に予習をしてのぞんでいるかを、アンケートした結果は次の通りである。

(高校についてののみ)

	1年		2年		3年		合計		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	
国語	1	3	7	23	5	5	13	31	44
地理	1	1					1	1	2
世界史			3	1		1	3	2	5
倫社					2		2		2
数学	40	36	21	24	23	19	84	79	163
生物			2	1	1	1	3	3	5
地学	1	1			1		2	1	3
物理					1		1		1
化学			1		3	2	4	2	6
英語	43	33	50	58	34	29	127	120	247

生徒からみて、授業をどのように改めてほしいか、アンケートの集計をそのまままとめると次の通りである。

[中学校]

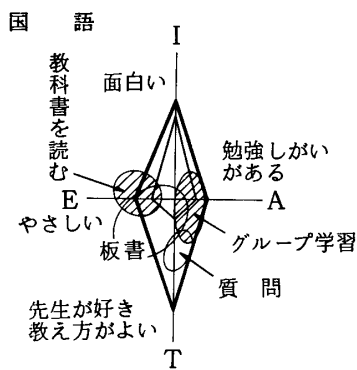
[高等学校]

		国語	社会科	理科	英語	国語	社会科	理科	英語	計
A	教科書を読むように	34	42	17	22	13	18	26	28	453
	黒板にしっかり書く	47	47	17	29	26	36	28	22	665
B	教科書にかまわずに	17	6	8	5	15	5	5	4	232
	質問(会話)を多く	27	18	18	6	8	9	67	56	537
	課題を多く出してほしい	13	12	9	9	10	7	19	10	166
C	実験を多くしてほしい	2	0	2	0	64	55	2	1	269
	図表・グラフを使う	2	0	15	16	15	9	1	3	139
	OHPを使う	8	0	33	22	14	5	8	5	194
	スライド、VTRで	6	1	45	34	21	7	5	2	333
D	生徒の発表を多く	15	19	15	12	5	6	10	6	136
	グループ学習をしたい	23	29	18	30	17	22	8	11	309
	個人指導を多く	6	1	4	1	4	5	19	19	192
		男	女	男	女	男	女	男	女	計

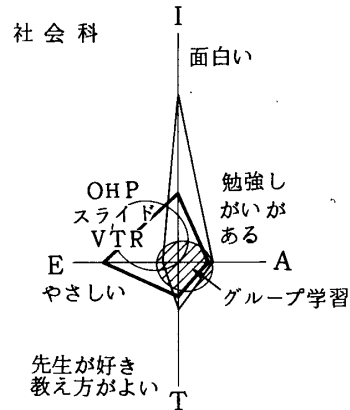
トータルな数値は、余り問題ではない。Aに併べた基本的事項への要求は、高校の方が基本的なことを重視すべしとみるべきでなく、高学年ほど教科書を読ませることや、板書することが少くなっている一般的傾向の反映であり、Bはそれとは対照的に教師による自由な指導、質問等による多様な授業展開を期待してのものである。Cは方法、就中教育機器や実験についての要望であり、理科について実験の希望は当然としても、図表、OHP、スライド、VTR等は学力面において層のひろがりをもつ生徒への理解を深める上で、授業改造の問題点となり得る。Dは学習形態についてであるが、国語でグループ学習をという希望が多いことが目につく。

たしかに言語教科(国語・英語)と社会科・理科(内容教科とよぶべきか)などで、授業の仕方についての生徒の注文希望はかなり異なる。この要望に出された教科の特色と、先述し、まとめた教科の好き嫌いの原因に関するI T E Aの類型とを重ね合わせると、ほぼ生徒たちの教科学習に対する一般的な構えを彫塗することができよう。

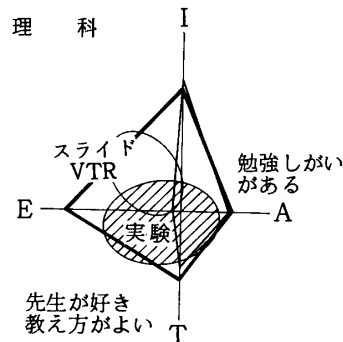
中学校での反応によってみると、国語ではA教科書を読むこと、板書すること、B質問をすること、そしてDグループ学習をすること、等の注文が同程度に出されているが、これを男女合計した先のグラフに位置づけると下の様になる。(太線は-の数値を示す)全体+よりも-の方が多数をしめる傾向を逆転させる方策を考えねばなるまい。



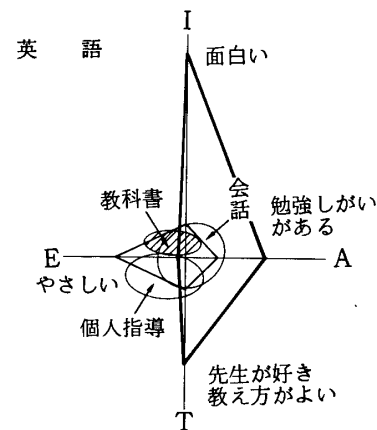
社会科はIで+指向がEで-が目立つが、この間をうめるものが、OHP、VTRなどの視聴覚器機による授業の改造であろう。むつかしいもの覚えにくいものと考えている生徒たちに理解を容易にするものとして。



理科はI A Tはほぼ+-均衡している、Eで-が多い。社会科と同じくスライドVTRとともに、実験による指導がそのポイントであると考えられる。



英語はやはり-指向はEのみ高く、生徒の希望には会話を多くとり入れたいとしているが、実際に会話が多く入ると却ってEに-が出るのではなからうか。



〔3〕まとめにかえて

教師が授業にのぞむ時、学習計画や進度、教材研究は常に念頭においているが、その割合には生徒の授業についての構えや要望には無関心で、往々にして生徒の不勉強、学習意欲の欠如を授業がうまくゆかなかつた原因としてしまう。しかしそれでは問題は解決しない。何が有効な指導法かを模索するとき、やはり生徒が各教科ごとに何を求めているか、その時間ごとに“構え”を確認することから始めるべきであろう。